

WORKS

Tradition to the future

漢字の歴史と文化を紡ぐ建築

漢検 漢字博物館・図書館

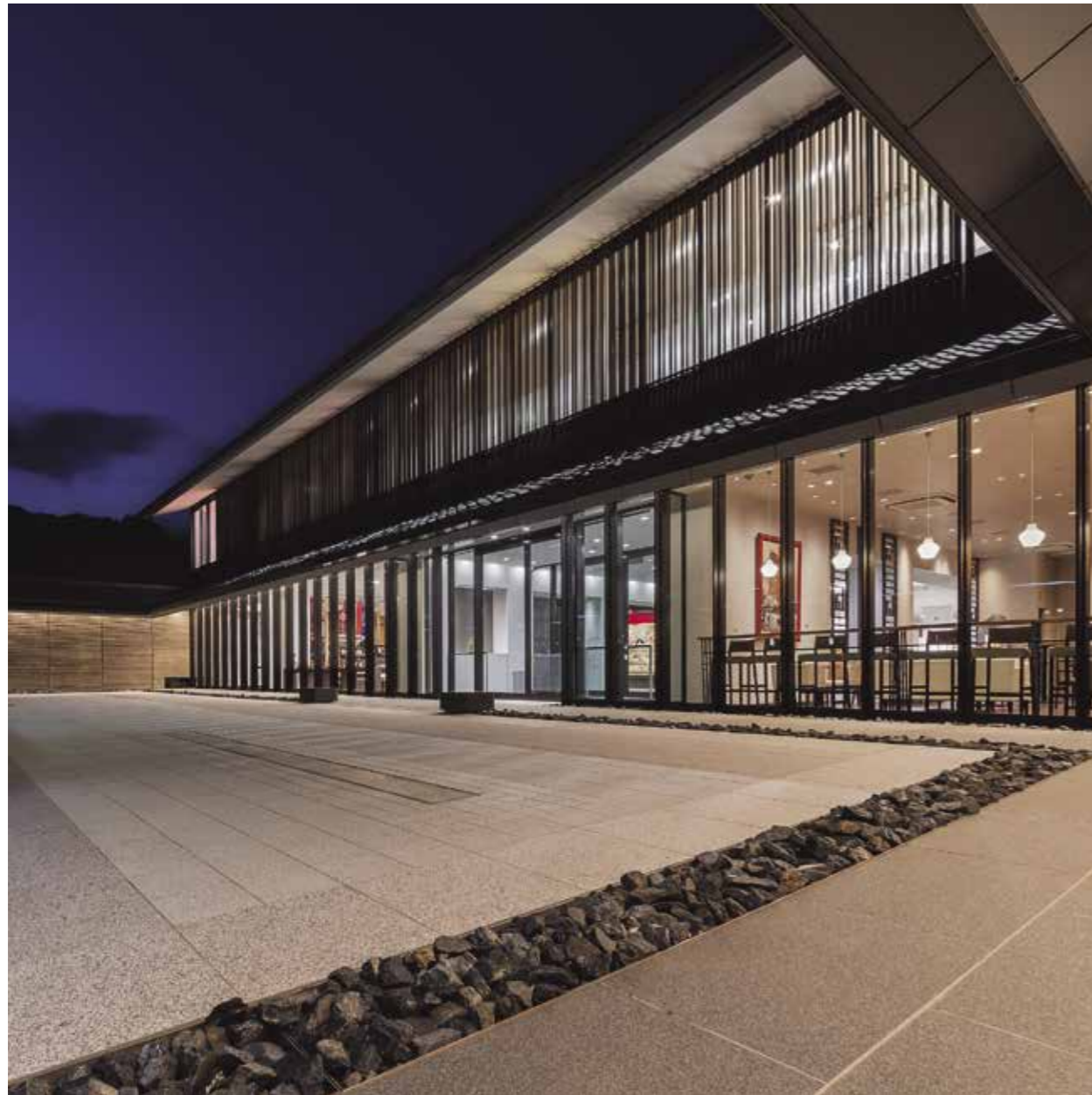
「公益財団法人 日本漢字能力検定協会(漢検)」による漢字を展示主体とした日本初となる体験型の博物館・図書館の計画である。体験型展示による驚きや発見を通じて、漢字という日本文化を楽しむことができる。

平成23年に閉校した京都市弥栄中学校跡地を計画地とし、近隣住民や旧校卒業生だけでなく、新たに訪れた人々にもこの地が長年かけて熟成した「学び」の心を継承してほしいという思いを込めた。

京都祇園の賑わいのある四条通りに面した外観の色彩計画には、漢字の筆書きからイメージされる墨色を採用した。古来より用いられる墨色の濃淡により、瓦屋根から前庭までデザインの統一感を作り出している。

2階の外装には縦格子のルーバーを設け、京都の町屋に見られる京格子を表現。瓦屋根や縦格子が京都の街並みに調和し、それぞれの小さな材料が規則正しく整列することにより緊張感のある美しい外観を目指した。





漢字の細部に宿る美しさを表現

漢字の終筆(とめ・はね・はらい)に宿る美しさを庇や軒先など建築のディテールに取り込んだ。前庭に深く突き出した庇が広い軒下空間を作り出し、来館者を包み込むように歓迎する。庇の軒先は樋を設けないシンプルで端正なディテールとし、先端から滴り落ちる雨水は石敷きの側溝に流れ込む。側溝に囲まれた前庭にはかつての京都市弥栄中学校の玄関に石段として使われた花崗岩をはめ込み、土地の歴史と融合した空間とした。

吹き抜け空間には5万字的の漢字を並べ、階段から眺めると壁面模様として認識し、壁に近づくと個々の漢字に対して意味を感じ取ることができる。

古来より現代に伝わる漢字に対する新しい発見を、未来につなげるための施設。建築も同様に大陸から伝わった様式が日本独自に発展してきた。普段意識せずに使っている二つの世界。訪れた人たちが「漢字」とともに「建築」についても何かを感じ取ってくれるとうれしい。



設計者：日野 惇, 黒川 宗範, 篠木 大輔, 齋藤 隆治